

【基調講演】 「我が国の文化ボランティアを総括する」

文化ボランティア・コーディネーター 大久保邦子さん

皆さまこんにちは！ ここは私にとってとても懐かしい所です。

と申しますのは、わが国で100年ぶりに国立博物館が太宰府にできるということで、オープンの1年位前の2004年にこのホールで、約750名のボランティア受け入れ研修のお手伝いさせていただいた思い出の場所です。年度末の寒い時期でしたが、150名～180名で4回、東京から土日にかけて2週間通わせていただきました。

今日のお話は、資料に沿って進めさせていただこうと思います。約40分間です。

自分でも呆れるくらいいろいろなボランティア活動をしてきましたので、何をお話していいかわかりませんが、お配りした資料を読んでいただくと、これからお話する内容は理解していただけるのではないかと思います。

今日は「文化ボランティアで豊かな社会、幸せな人生を！」というお話をしようと思います、

■4つの基本理念について

この4つの基本理念は、皆さんがボランティアをされるとき、講座などで聞かれていると思いますが、自発性、公共性、無償性、創造性で、この4つの基本理念というのは、すべてのボランティアに通じるものです。

約40数年前、私がPTAや自治会などの地域活動をしていた頃は、ボランティアとは福祉だとか、奉仕作業というイメージが根強くあり、PTAや自治会活動などがボランティアとはまったく思っていませんでした。しかし、この4つの基本理念をよくよく考えてみますと、私がやってきたことはすべてがある種のボランティアで、私のこれまでは、「ボランティア人生」だったのかな～と思う今日この頃です。

■ヌエック初代館長の言葉

ところで、国立女性教育会館（愛称:ヌエック）初代館長：縫田曄子さんの言葉というのが、私が＜文化ボランティア＞にのめり込むきっかけというか、原点になりました。

縫田さんという方は、革新都政の美濃部知事に抜擢されて、NHK職員から東京都の民生局長になった方ですが、この方のオリエンテーションでの次の言葉に出会い、その後の私の＜文化ボランティア＞人生が始まったといっても過言ではありません。縫田館長の言葉というのは、

「ボランティアというのは、自己犠牲や奉仕活動ではなく、＜持てる知識や持てる技能、持てる時間（余暇です！）で自己実現する活動＞なのです。」というもので、さらに、「皆さんの活動がこのような社会教育の施設に還元されるなら、それはこれからの社会教育の、ある意味で、これからの社会のボランティア活動です。」といわれたのです。

知識や特別の技術や技能がなくても、時間のある人が何かをやる。この3つの中のどれでもいいからあればやってみる。つまり自己実現する。その結果が社会に還元されるということです。

そして、「社会への大きな還元」に限らず、何気ないちょっとした活動、例えば電車で席を譲るというような、少しでも喜んでくれる人がいる。誰かの何かの役に立つ。それもボランティアで、社会還元の一つです。ボランティアとは、ただ行動や行為をするだけではなく「誰かの、何かの

役に立つ」つまり「社会還元」というところまでたどりつくことに意味があるわけです。

そのときの縫田館長のこれらの言葉に、「新しい何かが始まる！」「私がやりたかった新しいこれからのボランティアだ！」という思いが、私の中に、大袈裟ではなく、電流のように走ったのです。

■社会教育施設で初めての「文化ボランティア活動？」

広大な敷地のヌエックには、研修棟にホールや国際会議場、大小20余の研修室、体育館などがあり、本館にはレストランやホテルのような宿泊施設もありましたが、私のお目当ては図書館でした。

出版社をやめてから、フリーで編集の仕事もしていましたので、私にとって図書館は<情報の宝庫>であり、資料の整理などなら「私にもできる！」と思ったのが、私の<文化ボランティア>の始まりです。

ボランティア活動は自己申告でしたので、一週間に1日新聞切り抜き（クリッピング）のお手伝い、つまりボランティアをしたわけです。それまで私にとってボランティア＝奉仕活動というイメージでしたので、それらの活動は充実感があり楽しいという思いもありましたので、以来、ヌエックでの活動は20年間続きました。

それからもう一つ。

これは原稿の中にも始めて書きましたが、若いころ私は、雑誌編集の仕事をしており、戦前からのファッションや風俗を調べる特集の仕事で国立国会図書館に行ったのですが、その頃、国会図書館の貸し出しの手続きというのが非常に面倒で、雑誌数冊を見せてもらうだけで、大変な手間暇がかかるわけです。そこで裏技というか、特別のルートを使ってやっとのことで書庫に入れてもらいました。するとびっくりです！

50年位前の国会図書館の書庫には戦前からの婦人雑誌がずら〜っと山のように並べてあったのですが、そこは本当にひどい蜘蛛の巣だらけでした。

そのとき強烈に思ったことは、人手が足りないのなら、本や図書館が好きな市民が書庫に入って資料の整理や掃除など何でもいから手伝え市民もやりがいがあるだろうし、図書館の経費削減にもなるし一挙両得ではないか・・・、という思いでした。

このような経験がありましたので、縫田館長のこの言葉に、「ヌエックの図書館ではボランティアがやることがいっぱいあるのではないか」と思い、私の人生がパーッと広がっていくような気がして、ある意味での私の人生の出発点になったように思います。

そのあと紆余曲折はありましたが、気が付いてみたらそれが<文化ボランティア>だったというわけです。

■河合隼雄文化庁長官が提唱した「文化ボランティア」

「文化ボランティア」に関しては、臨床心理学の泰斗の河合隼雄さんが、2002年1月、文化庁長官を引き受けられた理由を、次の2点だったとおっしゃっています。

「(関西在住の河合さんにとって) 今、関西が経済的に非常に疲弊していると思われるので、文化面で関西を元気にしたい！ また、いま日本が全国的に元気がないので、ボランティアで元気付けたい！」と。そして、それまで福祉や災害などの奉仕的な面が強かったボランティアを、日常的な文化・芸術をささえる活動として推進したいと、「文化」と「ボランティア」を繋ぎあわせて、

「文化ボランティア」いう言葉を提唱されたのです。

★河合さんが提示された「文化ボランティア」の定義

それまでも、活動として図書館や博物館での活動や、演劇やコンサートなどをささえる活動はあったわけです。只、当時は、図書館ボランティアとか、社会教育施設ボランティア、或いは生涯学習ボランティアというように限定的というか堅いイメージで、個別に表現していました。そこに河合さんは、柔らかくて広がりのある「文化ボランティア」という名称を提唱されたのです。

そして、その定義として次のようにおっしゃっています。

「国の文書や審議会の答申などでも、文化ボランティアを定義したものはないらしいのですが、私は、無理に定義したり、範囲を決めて活動を限定したりするのは、あまり好ましくないな、と思っているのです。そうはいっても、ボランティア＝福祉や災害活動と解釈する人も多いでしょうから、文化芸術に自ら親しむとともに、他の人が親しむのに役立つ活動・・・それくらいのとらえ方がいいのではないかと思います。」と。これは実際に本の対談で私がお聞きした言葉です。何という奥の深い表現だろうと、感動したものです。

■主婦の仕事はボランティア！？

もう一つ、私が教えられたことを紹介させていただきます。まだ私が講座・講演などをはじめた最初のころですが、県内の近くの公民館に呼ばれて「ボランティアとは何か」といった基礎講座でのことです。受講生は50名足らずのほとんどが主婦の方々でした。基本理念の話をしたあと「私の話でボランティアとは何かがお分かりいただけたでしょうか？」と尋ねたとき、ある若い主婦が「あの～、先生の話伺っていると、主婦の仕事ってボランティアと言っているのではないのでしょうか？」と自信なさそうに言われたのです。

これを聞いて、私、すごく嬉しかったですね。この方は本当にボランティアの真髓みたいなことを理解されている。主婦の仕事って、やってもやってもきりが無い。しかし、家族のためだし、家族に喜ばれている。賃金はもらわなくても、喜びという見返りはありますよね、この方良く分かってくださったなあ～！とうれしかったし、逆に私は学びました。身近なところに本当に喜んでもらえることが結構ある、それがボランティアなのだ！・・・と。

私自身、まだ子どもが学校に行っていたころ、お天気のいい日に、汚れた彼らの靴下を洗ったり、ベランダにお布団を干したりしていたとき、家族の幸せそうな顔を思い、何とも言えない幸せを感じたことがあります。主婦の仕事もある意味で立派なボランティアなのですよね。

ボランティアってやっていることが喜ばれる、自分だけが満足するのではなく誰かに喜ばれることがボランティアの本当の姿だな～と、理解を深めた思いでした。

■地域社会における文化ボランティアの実際

今回、社会教育施設という言葉に敢えて独断でミュージアムと“ルビ”を付けさせていただきました。

今、社会教育施設というと、公民館や図書館などがまず挙げられるでしょう。その職員がどう考えているか分かりませんが、よくよく考えたら、そこには全部共通するものがあります。しかも最近は、ボーダレスといって、例えば図書館でコンサートをやったり、公民館で演劇をやったり、いろんなイベントをやっていますね。外国の大きな図書館や博物館などでは貸し切りで結婚式やパーティなど、いろいろなことをやるようになりました。

言い換えれば、社会教育施設はミュージアムであり、利用者が楽しむところ、地域の人たちが楽しむところであるといえます。市民が気軽に施設を利用しながら、施設をささえるような活動が、それが施設や社会や地域に還元される、しかも気が付けばそれが自分の力にもなっている。ボランティアというのは、活動すればするほど生きがいになるし、生きる力の源になるといえると思います。

・・・ちょっと間を置き、(このことで何か質問があったら、手を挙げてください。)

それぞれの人や人生にとって“ボランティア”とは、やりたいこと、好きなことをやってそれが生きがいになり、家族や地域コミュニティ職場や遊びの仲間でもそうですが、ともにやることで生きるエネルギーになっている・・・そんな活動が文化ボランティア、そのような活動をするところが公民館など社会教育施設なのです。それも楽しみながらやるのがポイントです。

もちろん、その楽しみの中には、厄介なことがあったり、苦しみもあるかもしれません。でも大変なことがあったほうが、よりやりがいがあったり、ふくらみが出てくると思います。そのことが何か役に立つことだったら、ちっとも大変だとは思わないし、むしろ喜びに転嫁されるのです。

ボランティアと言うのはやっぱり、“生きる力”なのです。

★生きる力とボランティア

私には、4歳上の姉がいます。鹿児島の実家に住んでいます。今日終わったら墓参りを兼ねて鹿児島に帰る予定です。現在、姉は84歳で、娘二人が公務員で隣近所に住んでいるので、未だに小学校から大学生まで4人の孫の世話・・・食事から洗濯、塾の送り迎えなど、ず〜っとやっているようです。時には「大変だ〜!」と悲鳴を上げたり文句をいったりすることもあります。それがある意味で、姉にとってはエネルギーになっているな〜と、私は最近、つくづくそう思うようになりました。姪たちも案外、姉のそういう性格を知っていて、敢て頼りにしているのではないかと・・・と。(笑)

一般論ですが、何かやろうと思えば、たとえば食事づくり一つにしても、やはりメニューから材料の購入、つまり、いろんな計画、企画を立てて全部頭に入っていないと出来ないわけです。それが人に喜ばれることなら、立派なボランティアですし、学習にもなり、生きる力にもなるのではないかと。

最近、近所の一人暮らしや高齢の夫婦の人たちを見ていると、趣味などがいっぱいある人は別ですが、多くの人が「何もすることがない」といって、どんどん元気がなくなり老化が進んでいます。

ボランティアとは自発性ですが、人から依頼される、頼りにされることでやるようになることも・・・。すると不思議に元気になる。自治会活動でもなんでもいいのです。こういったことも自分のためにもなるし、立派なボランティア活動なのだ、最近、そういう思いを強くするようになりました。

■公務員の仕事はボランティア！？ ～共育ちということ～

ところで、公務員の人に言いたいのですが、私は公務員の仕事はボランティアだと思います。給料はもらっているわけですが、仕事は、やればやるだけ給料が上がるわけではないわけです。

大変な仕事で頑張って、つまりいい仕事をして地域に還元することで住民に喜ばれるわけですね。なので、公務員の仕事はある意味で＜本当のボランティア＞だ、とてもやりがいのある仕事だと思っています。

それともう1つの視点として、＜共育ち＞についてです。

例えば、社会教育施設のボランティアと職員、或いは学校なら先生と生徒、自治体職員と住民、それらの人たちは、共に、気づき合い、支え合い、学び合って成長する関係だと思っています。一生懸命支え合い、ぶつかり合いながらやっていくことでお互いが成長していく・・・そういう関係や仕掛けが、実は私たちの周りにはいっぱいあるわけで、こういう仕掛けもある種のボランティア活動の醍醐味といえるのではないのでしょうか。

話があっちへいったりこっちへいったりしますけれど、(笑)あとでゆっくり資料を読んでいただければ、ナルホドそういうことかと、分かっていただけるかなと思います。

■結びにかえて ～伝えたいこと～

★ボランティアとは

あるとき、吉澤英子さん（当時：東洋大学教授）が1987年3月号の「社会教育」に書かれた文章に、ボランティアの本当の意味を発見しました。

100年くらい前、ボランティアという外来語を“どういう日本の言葉”にしようかと識者が集まって研究会議をしたときのこと。その中に市民意識に基づく市民活動、市民権を尊重するような活動が大事であると書かれていたそうです。ボランティアに市民意識があることがポイントなのです。

ボランティアとは市民意識に基づいた社会参加を、積極的に推進するような活動だったわけですが、最適な訳語が思いつかなかったため、そのままボランティアとして、青少年活動や婦人会活動に奉仕活動などとして取り入れたため、ボランティア＝奉仕活動というイメージが定着してしまったというのです。それがず～と政策として続いて定着してきた不幸な歴史があり、いつの間にかボランティアって奉仕活動だとか、或いは福祉の分野の活動だ、というふうに刷り込みがなされてきたわけです。

ある時、「大久保さんたちがやってることは市民活動だ」とある人にやや否定的にいわれて落ち込んだことがありますが、10年ほど前、北海道大学のボランティア研究会で、主催者の北大教授が「ボランティア活動は市民活動だ」といわれて再認識するとともに、我が意を得たり！と思ったことがあります。ボランティアとは「市民意識に基づく市民活動」なのです。

★災害ボランティアと若者たち

最近ではボランティアという言葉はかなり広まったというか、特に災害ボランティアがボランティア活動として注目されるようになりました。

先の「3.11 東日本大震災」のボランティアに関して、当時の奥山恵美子仙台市長の言葉に、

「この大震災で良かったことの1つであり大事なことは、学生たち高校生も含めて若者が、自主的にボランティアを始めたこと。しかもその人達が活動すると笑顔が戻ってくること」というのがありました。

若者たちがこの大震災を体験するということは、大変な不幸なことだったけれども、ボランテ

ィアの本当の醍醐味というか真髄・・・、そういうものをこの活動の中で若者たちが味わって
いけたということは、結果的にですが、とてもいいことだったといわれています。

テレビで若者が災害の被災地などに行って泥を掘り出す・・・そのような姿を見ていると、現
地に行ったボランティアは、本当にやった～！と、達成感のようなものを体験しているな～と、
私たちは感じるのですね。そんな打ち込めるボランティアというのは、素敵なことだと思います。

★若者のボランティア活動を応援する

来年はオリンピック・パラリンピックが日本で開催されます。このオリ・パラを皆さまはどの
ように理解されているかわかりませんが、実は私は若者たちに学びました。雑誌「社会教育」は、
社会教育関係の公務員ばかりでなく、皆さまに読んでいただきたい雑誌ですが、この雑誌で、東
京の多摩地区の公務員である社会教育主事の若者たちが「オリ・パラで地域社会を何とか活性化
したい！」と、ネットワークを組んで活動をしているのです。

彼らに教わったことが沢山ありますが、「オリンピックはスポーツの祭典、世界大会だと、とら
えられがちですが、実はスポーツだけではなく、文化や芸術などあらゆることをその「文化力で
世界を、地域を良くしよう！」という世界的なイベントだということです。

オリ・パラの趣旨を生かした自治体の企画や活動は、自治体にとっては大きな力になるはずだ
し、特に今回はパラリンピックに非常に力を入れていますから、このオリ・パラを自治体の職員
の方にぜひとも学んでほしいと思います。

今は、この社会教育主事の若者たちを応援することが、私にとって楽しみであり、ある意味で
のボランティアです。

★マズローの5段階欲求説とミュージアムボランティア

もう一つ申し上げたいことは、マズローの五段階欲求説です。
マズローという心理学者が、人間の欲求にはいろんな段階があり、お腹を満たす、眠たい、そう
いう生理的欲求は5段階の一番下です。人間の欲求には五段階あり、欲求の形が三角形をなして
いるとする説ですが、五段階の一番上が自己実現で、つまりボランティア活動というのです。

ボランティア活動が自己実現ということで、いろいろな先生方が講座で使われていましたが、
人間の一番上の欲求は自己実現だと言う、マズローの五段階説というのを私はあちこちの講座で
紹介してきました。

私がこの図を見ながら思うのは、一番最初は生命の欲求ですね、お腹を満たす。お腹を満たす
と眠たくなるようですが、その次には、安全安定と言う欲求がきます。家族があつて帰る場所が
ある。今、孤独な人が増えているようですが、特に若者が孤独になりがちです。私は社会教育施
設のボランティアというのは、図書館ボランティアでも博物館ボランティアでもいいですが、場
所がそこにあるということです。そこに行けば活動があり仲間がいる、この“仲間”というのも
一つのキーワードだと思います。仲間がいるという事と、たとえば図書館ボランティアは本の好
きな人が多いと思いますが、そこに本や同じ趣味の仲間がいるということです。

災害ボランティアは災害がないと活動の場がないわけですが、文化施設のボランティアは何時
でも拠点はあるし、やればやるほど充実し、施設も活性化します。社会教育施設や図書館、博物
館、美術館など、そこに行くと仲間ができ、大体共通する話題の仲間がいるのが特徴です。

今、人と話すことがだんだん無くなったと近所の奥さんたちが言われますが、話しの出来る友達がいるというのは生きていく上でかなり大きな要素になります。

文化ボランティア、ミュージアムボランティアと言うのは、いろんな意味でお勧めだなあと考えます。もちろん、地域の身近な公民館ボランティアもいいと思います。

公民館だけでなく、今、あちこちで盛んなのは“カフェ”といって拠点活動をしている若者が結構いますが、そんな場をつくって提供する、そこに人が集まってくる、そこではいろんな情報が動き始めています。社会教育施設という範疇に入らなくても拠点のある活動、それは災害時でも何でもない平時、平和の時に出来る活動です。これらをもし名付けるなら“文化ボランティア”と言ってもいいのかな、と思います。

文化ボランティアって非常にキザっぽく聞こえますが、でも考えれば考えるほどとても大事な、魅力的なボランティアだと思います。生きるのに必要な深い意味も含んでいるし、何気なく地域で出来る活動も全部含まれています。

このようなボランティアをぜひ進めて欲しいし、そのような場・・・図書館や公民館など地域のたまり場にいくと、年配の人や沢山の体験を重ねてきた方など話のわかる人が必ずいて教えてくれます。

“話がわかる仲間がいる”というのはお金にはかえられない魅力であり、エネルギーになります。これは私自身が実際に体験したことです。勿論ITでもSNSでも何でもいいですよ。でも実際に身近に触れ合って喜び合う、悲しみでもいいし話し合えるというのは、生きていく上でとても大事なことだなあと、つくづく実感しています。いやなことがあったり、仕事が大変でもこういうところに行くと自分が解放できます。必ず気付きや学びがあるはずですよ。文化ボランティアはやればやるほど面白いし、意義ある・・・というのが今の私の想いです。

■最後に河合隼雄さんの＜文化ボランティア＞への思い！

最後に河合隼雄さんの＜文化ボランティア＞への思いを紹介させていただきます。河合文化庁長官は任期半ばにして亡くなれましたが、もっといろいろお話を伺っておけばよかったと思います。

この河合さんの言葉は直接お聞きしたものではありません。「文化ボランティア全国フォーラム」の東京開催のフォーラムで、江戸東京博物館の竹内誠名誉館長が話された内容です。

「河合隼雄さんはダジャレがお好きで、お会いするたびに軽妙洒落な語り口でいろいろおっしゃっていましたが、或る時、真剣な様子で文化力の大切さをおっしゃったのです。

日韓の問題が大変なときに日韓の若者たちがいろんな歌を歌ったり、芸能活動や何かをやっていますね、まさにあれが文化力なんですよ。文化力で日本を元気にしないとだめです！と。

武器で国を守る、お金をうんと懸けて武器で守るより、文化で守った方が余程いい！例えば、韓国や中国と文化交流をすることで戦争をしないで済むとすれば、そういう文化の力が大事だし、そういう文化力が必要で、そういう文化ボランティアが育ってほしいんですがね～！と・・・。」

私はこの話を伺って、そうだったんだと深い感銘を覚えました。

河合さんの言葉として、文化力が持つ力の大きさ、国と国の関係の中で文化力が生きてくる力の大きさを改めて再認識した次第です。これでひとまず私のお話は終わりにさせていただきます。ご清聴有難うございました。